様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３４５１７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００８５１

研究課題名（和文）共生社会を目指す教育の実現のための学習障害児童への英語学習支援の統合的研究

研究課題名（英文）An Integrated Research of English-Learning Supports for Students with Leaning Difficulties-To Realize the Education Aiming at the Inclusive Society

研究代表者
村上　加代子（MURAKAMI, Kayoko）

武庫川女子大学・教育学部・准教授

研究者番号：００５５２９４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、学習障害（LD）を持つ児童の英語学習における困難を把握し、指導方法の改善を目指した。LD児童の語彙、文字認識力、音韻意識に関する調査を通じ、小学生向けの「躓きチェックテスト」を開発した。英語の音素操作や母国語の音韻処理に関連する問題を明らかにし、音韻意識を育てる指導の必要性を示した。最終年度には調査報告を論文化し、応用言語学会大会で発表した。これらの研究成果はHPで公開している。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、学習障害（LD）を持つ児童の英語学習における困難を詳細に把握し、語彙、文字認識力、音韻意識に関するデータを蓄積した点にある。これにより、音韻意識を育てる指導の重要性が示され、小学生向けの「躓きチェックテスト」の開発が進んだことは、教育学や言語学における貴重な知見を提供する。社会的意義としては、LD児童への適切な支援が可能となり、教育機会の均等化に寄与する点である。これにより、全ての児童が適切な教育を受けられる環境づくりが進むことが期待される。

研究成果の概要（英文）：This research aimed to understand the difficulties faced by children with learning disabilities (LD) in learning English and to improve teaching methods. Through investigations into the vocabulary, character recognition, and phonological awareness of LD children, a "struggling check test" for elementary school students was developed. The study clarified issues related to the manipulation of English phonemes and the phonological processing of the mother tongue, highlighting the need for instruction that fosters phonological awareness. In the final year, the research results were compiled into a paper and presented at the Applied Linguistics Society conference. These research findings are available on our website.

研究分野：英語教育

キーワード：小学校英語　学習障害　インクルーシブ教育　音韻意識　語彙指導　躓きチェックテスト　文字認識力

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## １．研究開始当初の背景

我が国が目指す共生社会の形成を目的としたインクルーシブ教育システムでは、障害がある者もない者も共に学べる環境の構築が推進されている（文科省，2012)。通常学級における発達障害のある児童・生徒の割合は約6.5%と報告されており、学習障害（LD）を持つ者は「聞く・話す・読む・書く」などの基本的な学習活動に顕著な困難がある。これらの児童は知的遅れがないため、障害が見逃されやすい特徴がある。英語学習においては、学習の初期段階から困難が予測されるが、LD 児童を対象とした英語の困難を測定するテストは国内に存在しないため、その実態は明らかになっていない。英語は未習の状態で学習が始まり、学習が進むにつれて学力の格差や困難が顕在化する教科であるため、「生徒が困っている」と気付くまでに時間がかかり、学習の遅れが重篤化しやすい。しかし、先行研究によれば母語で既に困難が生じている場合、外国語習得時にも類似の困難を抱えることが指摘されている。例えば、アルファベットの書字が困難な児童が漢字も全く書けない事例や、英語の文字と音の操作に弱い中学生が小学校時代にかな文字の読み習得にも困難があった事例などが報告されている（村上，2016)。これらの事例から、英語の読み書きなどの困難状況を把握する際には、国語科目で見られる学習上の困難も考慮に入れ、多方面からの情報収集と分析により、より深い洞察が得られると考えられる。

## ２．研究の目的

英語教育において個々のニーズに合わせた柔軟な指導を実践するためには、現在既に生じている躓きの現状把握と要因分析に基づく指導手法の提供が必要である。しかし、国内では英語学習における学習障害児童に関する調査がほとんど行われておらず、実態把握が進んでいない。英語はある程度の学習期間を経なければ躓きが顕在化しないこと、認知特性と英語の困難を関連づけた調査が国内で非常に少ないことがその要因である。小中連携を視野に入れた英語教育の成功には、小学校での音声や文字の導入段階から躓きに気付き、その前段階で適切な指導へと導くことが欠かせない。これらの課題を解決するために、本研究では小学校教員向け「躓きチェックテスト」の開発のための現状把握を目的とする。

## ３．研究の方法

本研究では、学習者ニーズの把握を「チェックテスト作成」のためのファーストステップとして、以下の４つの調査を実施した。

研究 1：LD 児童を対象とした困難状況の把握調査（2020―2024 年）

研究 2：公立小学校における文字の認識力と語彙に関する調査（2020-2023 年）

研究 3：小学生６年生のアルファベット書字とローマ字の関係性についての調査

研究 4：小学生の語彙指導調査（2020 年-2023 年）

コロナ禍であったため、初年度に調査を実施することが困難であった。これにより調査開始に約一年間以上の遅れが生じ、調査内容が制限されたものもあった（例：授業への指導介入など)。

研究１においては、LD のある小中学生を対象にインタビューおよび英語の理解力に関する調査を行った。主に読み書き上の問題の現れ方や躓きの箇所を探索することが目的である。対象者は、申請者の主催する相談室に訪問した英語学習に困難を感じる小中学生であり、保護者および本人へのインタビューと英語理解力や文字に関するテストを実施し、躓きの箇所の把握および個々の認知特性に合わせた学習ニーズについて分析した。テスト内容は URAWSS-English、アルファベットの聴写、無意味単語の聴写、英語音韻意識標準テスト（SPAT-R）を含む。

研究 2 は公立小学校における文字の認識力と語彙に関する実態把握を目的とし、2020 年 12 月に公立小学校 4 校の 5、6 年生（255 名）を対象に語彙・アルファベットの読み書き、音素意識のパイロット調査を実施した。語彙、アルファベットテストは事前に録音された CD を協力校に送付し、児童はタスクを数回試行した後、マークシートに回答する形式であった。

研究 3 は小学生 6 年生のアルファベット書字とローマ字の習得状況との関係性を明らかにすることを目的とし、小学 6 年生（61 名）を対象に、アルファベットの聴写、ローマ字の読み、書き、漢字の書き取り、日本語の視写に関する調査を実施した。

研究 4 では、小学生の語彙指導調査を行い、2020 年には高学年で使用されている検定教科書 7 社の使用語彙を比較分析し、使用語彙の適切さや課題について分析した。さらに、英語の聴解に困難さのある児童を抽出するテスト作成のためのパイロット調査を経て、900 名以上の児童を対象とした聴覚語彙理解テストを実施した。

以上の研究における個人情報保護に関しては適切な手続きに従って管理された。また、対象者の研究への参加は任意であることを伝え、学校、または、本人と保護者からの同意を得ている。

## ４．研究成果

### 研究 1 の結果

2019 年から学習相談を開始し、約 40 名の相談者から調査協力を得た。音韻意識テストの結果、全員が英語の音素操作に課題を抱え、日本語音節化する傾向が確認された。これは日本人特有の特徴であり、先行研究でも指摘されている内容と一致する。対象者に対して音韻意識とフォニックスの指導介入を実施した結果、音韻タスク全般において性能が向上し、未知の単語の読みやスペリングの向上も見られた。URAWSS-English テストでは、「意味がわかるが、スペリングが極端に苦手」（村上&村田，2022）という例が確認されるなど、文字使用場面に苦手さを抱える学習者には共通してアルファベットの文字音習得の不十分さや、音韻意識の低さが確認された。困難さの程度には個人差があることから、調査の結果を一般化することは難しいものの、今後の英単語指導に音と文字の関係習得が関わっていることが示唆された。

### 研究 2 の結果

公立小学校における文字の認識力と語彙に関する調査は、全対象校（４校）で実施され、2022 年には 1 校のデータ分析を完了した。調査結果から、小学高学年生であっても、アルファベットの習得は完全ではなく、大文字よりも小文字の方が書き取り、読み、文字選択の各タスクで正答率が低いことが明らかになった。また、児童の苦手な点が視覚的に把握できるよう、レーダーチャートを用いて個別タスク結果を示すよう工夫した。例えば、図 1 のチャートの対象児童はできることと、できないことの差が大きい児童である。クラス平均に比べると「小文字音選択」や「小文字形選択」「大文字書き取り」「小文字書き取り」で低いスコアを記録している。つまり、大文字は読むことや形を選ぶことは可能だが、自分で文字形を想起して書くことが苦手であり、小文字は音声（文字の名前の音）も文字形も未習得であることが見てわかる。しかし、「文字選択」では平均以上のスコアを記録しているのは、担任教員が多感覚で文字音（フォニックス）を指導したことが効果を発揮していると考えられる（村上・宮谷・土屋・村田，2022）。「大文字と小文字の習得状況」「読みと書きの習得バランス」「指導法の違い」を可視化することにより、今

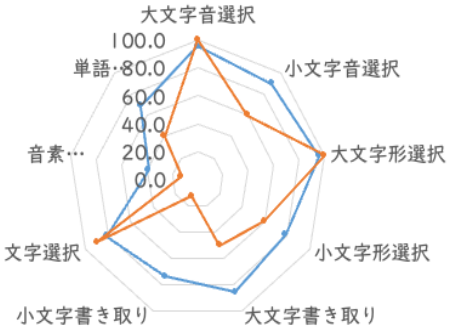


図 1 児童 A の課題チャート

後の個別最適の指導に生かすことが期待できる。

**研究 3 の結果**

小学 6 年生 61 名を対象に実施したアルファベット書字とローマ字の習得状況に関する調査では、アルファベット 26 文字の音をランダムに聞き書き取る聴写テストで、20 問未満の正答数を記録した児童が 8 名確認された。これらの児童のローマ字の書きについて、学年平均が 5 点満点中 4.1 点であるのに対し、抽出群は 3.1 点であった。漢字の書き取りも同様に低く、アルファベットの聴写が苦手な児童は、ローマ字や漢字でも同様に困難を抱えていることが明らかになった。ただし、日本語の書字速度には顕著な遅さは見られなかった。以上から、アルファベットの聴写が困難な児童には、漢字やローマ字など音韻処理能力を要求される課題全般につまずきがあるが、音韻処理の負荷が少ない日本語の視写との相関は見られなかった。今後はアルファベットの音韻意識を高める指導が必要であると考えられ、音韻意識を育てる指導がアルファベットの聴写正答率向上にどの程度影響するかを検証する余地がある。

**研究 4 の結果**

2020 年に実施された小学高学年用の検定教科書 7 社の語彙比較分析では、教科書に記載されている語彙の適切性や課題点が明らかにされた。この調査により、小学校外国語科の教育機会均等を保障し、地域や学校間の指導格差を縮めるための具体的な方策が求められることが示された。2020 年に 957 名の小学生を対象に実施した聴解テストで、成績の高群と低群が明確に分かれ、音声指導の効果を感じていない下位群に対するさらなる支援の必要性が示された。「絵」と「音声」のマッチングテスト（図 2）は、聴覚理解のスクリーニングツールとしての可能性が示唆された。

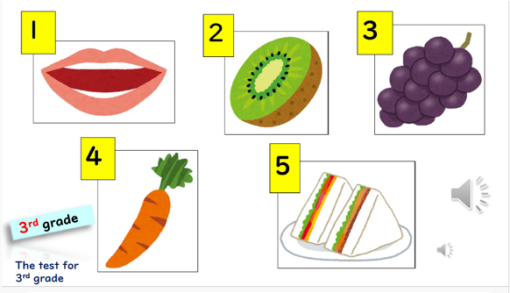


**図 2　マッチングテストタスク例**

**5. 調査のまとめ**

本研究は、学習障害（LD）のある児童の躓き早期発見のためのテスト開発を目的として開始された。研究の成果として、小・中学生の英語学習困難者の躓きの実態把握や指導介入が行われ、担任教員にも理解しやすいレーダーチャートを用いた文字・語彙・音韻意識テストの習得状況把握テストが試行された。また、小学生のアルファベットとローマ字の関係性に関する調査や、聴覚的な語彙力から外国語学習の困難さを発見する試みも行われ、幅広いデータが得られた。しかしながら、これらの結果をもとに一つのアセスメントテストを構築する段階にはまだ至っておらず、この点が次の研究課題として設定されている。今後は、得られたデータを基に、今後、包括的なアセスメントツールの開発が求められる。

**引用文献**

文部科学省（2012）「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」.
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1328729.htm

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>村田美和,巖淵守 | ４．巻<br>30 |
| ２．論文標題<br>中学生の英語学習における ICT端末による読み書きの代替 ―音声読み上げ機能とスペル入力補助を活用して課題に取り組む― | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>LD研究 | ６．最初と最後の頁<br>314-320 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>酒井志延，土屋佳雅里 | ４．巻<br>59 |
| ２．論文標題<br>英語聴解で学習困難を持つ児童を識別するための研究 | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>商大紀要 | ６．最初と最後の頁<br>37-52 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計22件（うち招待講演　4件／うち国際学会　2件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>村上加代子，村田美和，竹田里香 |
| ２．発表標題<br>「学習障害のある英語学習者に関するシンポジウムー当事者視点、個に合わせた指導、ドラマ教育の可能性」 |
| ３．学会等名<br>言語教育エキスポ2023 |
| ４．発表年<br>2023年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>村上加代子 |
| ２．発表標題<br>これでいいのか？ー日本の英語教育と特別支援教育ー |
| ３．学会等名<br>英語教育ユニバーサルデザイン研究学会第2回研究会 |
| ４．発表年<br>2023年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>村上加代子 |
| ２．発表標題<br>個に応じた英語指導を目指してーユニバーサルデザインの授業作り |
| ３．学会等名<br>英語授業研究学会第 34 回全国大会（招待講演） |
| ４．発表年<br>2023年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>村上加代子，土屋佳雅里，村田美和，酒井志延 |
| ２．発表標題<br>日本における小学生の英語学習困難 の早期発見のためのテスト開発 |
| ３．学会等名<br>科研研究報告会（オンライン） |
| ４．発表年<br>2023年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Kagari, Tsuchiya & Shien, Sakai. |
| ２．発表標題<br>A Study on Identification of Children with Learning Difficulties in Listening Comprehension and Sementic. |
| ３．学会等名<br>AILA @ Lyon, France.（国際学会） |
| ４．発表年<br>2023年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Kayoko, Murakami & Miwa, Murata |
| ２．発表標題<br>Development of a Test for Early Detection of  English Learning Difficulties of Elementary School Students in Japan. |
| ３．学会等名<br>AILA (International Association of Apllied Linguistics) @ Lyon, France.（国際学会） |
| ４．発表年<br>2023年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>村上加代子 |
| ２．発表標題<br>英単語で躓く児童生徒への指導のヒント |
| ３．学会等名<br>第四回S.E.N.S年次大会／北海道（招待講演） |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>村上加代子，加藤幸子，小幡理恵 |
| ２．発表標題<br>英語の読み書きが困難な中学生２事例への指導実践報告 |
| ３．学会等名<br>一般社団法人日本LD学会第３１回大会（ポスター発表） |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>村上加代子 |
| ２．発表標題<br>「つまずく」学習者に関わる視点ーなぜへの答えを求めて |
| ３．学会等名<br>ことばの科学会第14回年次大会 |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>村上加代子，宮谷祐史，土屋佳雅里，村田美和 |
| ２．発表標題<br>小学校高学年の英語文字学習における躓きの視覚化の試み:文字ー音対応・語彙・音韻意識の多角的分析 |
| ３．学会等名<br>小学校英語教育学会 |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>村上加代子 & 村田美和 |
| ２．発表標題<br>URAWSS-Englishでみる英語の躓き |
| ３．学会等名<br>科研報告「英語で躓いている学習者を発見する方法のワークショップ」 |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>村上加代子 |
| ２．発表標題<br>個に応じた英語学習のスキルと方略を学ぶ-英語ができないのはなぜか- |
| ３．学会等名<br>大阪医科薬科大学 LD センター講演会（招待講演） |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>村上加代子，醍醐路子，黒木愛 |
| ２．発表標題<br>英語にカナをふる指導についてー小学校、中学校、発達支援の立場から |
| ３．学会等名<br>言語エキスポ2022 |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>村上加代子 |
| ２．発表標題<br>speedから/p/を抜くと「スード」になるのはなぜか 日本語音節感覚が英語の音素操作に与える影響に関する考察 |
| ３．学会等名<br>英語教育ユニバーサルデザイン研究学会第3回研究大会 |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>酒井志延 ＆ 土屋佳雅里 |
| ２．発表標題<br>小学生を対象とした英語のつまずき調査テストの開発 |
| ３．学会等名<br>言語エキスポ2021 |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>村上加代子 |
| ２．発表標題<br>ユニバーサルデザインの視点を取り入れた英語教育 |
| ３．学会等名<br>第189回国治研セミナー（招待講演） |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>村上加代子 |
| ２．発表標題<br>読み書きに困難がある中学２年生への音韻意識とデコーディング指導ー中学生への効果的な英単語読み指導の工夫シンポジウム |
| ３．学会等名<br>日本LD学会第２９回大会 |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>村上加代子 |
| ２．発表標題<br>中学生の英単語聴写課題の回答分析 |
| ３．学会等名<br>英語教育ユニバーサルデザイン研究学会 |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>村上加代子 |
| ２．発表標題<br>読み書き困難児童生徒の英語の音韻認識調査報告（中間報告） |
| ３．学会等名<br>ことばの科学会 |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>村上加代子 |
| ２．発表標題<br>読み処理速度の遅い中学生の事例報告ー進路を拓く合理的配慮提供の実践シンポジウム |
| ３．学会等名<br>日本LD学会第29回大会 |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>村田美和 |
| ２．発表標題<br>英語の読み書きとiPadの活用について |
| ３．学会等名<br>英語教育ユニバーサルデザイン研究学会 |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>村上加代子，村田美和，酒井志延 |
| ２．発表標題<br>小学生を対象とした英語のつまずき調査テストの開発について |
| ３．学会等名<br>言語エキスポ2020 |
| ４．発表年<br>2020年 |

〔図書〕　計3件

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>酒井志延、土屋佳雅里 | 4．発行年<br>2022年 |
| 2．出版社<br>大修館書店 | 5．総ページ数<br>208 |
| 3．書名<br>「言いたい」が「言えた！」に変わる小学校英語授業 | |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>北出勝也，村上加代子 | 4．発行年<br>2020年 |
| 2．出版社<br>東京書籍 | 5．総ページ数<br>143 |
| 3．書名<br>ビジョントレーニングでアルファベットはじめてドリル | |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>飯島睦美，村上加代子,三木さゆり，行岡七重 | 4．発行年<br>2020年 |
| 2．出版社<br>明治図書出版 | 5．総ページ数<br>143 |
| 3．書名<br>多感覚を生かして学ぶ小学校英語のユニバーサルデザイン | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

本科研調査の結果公開HP
共生社会を目指す教育の実現のための学習障害児童への英語学習支援の統合的研究
https://padlet.com/731161/padlet-xqr1ik0z2ctaldw0
中学生を対象にした英単語で躓いている学習者を発見する方法のワークショップ
https://padlet.com/731161/padlet-d2x2s8dna2kilot5

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究分担者 | 村田　美和<br>(MURATA Miwa)<br>(00756330) | 高崎健康福祉大学・人間発達学部・講師<br>(32305) | |
| 研究分担者 | 酒井　志延<br>(SAKAI Shien)<br>(30289780) | 千葉商科大学・商経学部・教授<br>(32504) | |
| 研究分担者 | 土屋　佳雅里<br>(TSUCHIYA Kagari)<br>(50835353) | 東京成徳大学・子ども学部・助教<br>(32521) | |

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|